

## 抄 録

## 素敵なスマイルの主観評価とその口周囲組織の特徴

高波里帆

先人の研究において好感もてるスマイルとは口角があがり、口が大きく開いた形であると言われていた。果たして本当にそうであろうか。

本研究は、スマイルに対する歯科衛生士学科の学生の審美的感覚が教育課程の進行に応じて違ってくるのかどうか、また、素敵なスマイルの構成要素として、口唇やその周囲の生体組織に特徴があるのかどうかについて検討することを目的としている。20代女性20名の口元の写真撮影と生体計測を行い、得られた口元のスマイル写真による主観評価を明倫短期大学歯科衛生士学科1～3年生130名（3年生41名、2年生51名、1年生38名）を対象に実施した。20名から得られた口元写真を歯並びの影響がでないように、歯と歯肉を白く加工したスマイル写真と加工前のスマイル写真の「笑顔の素敵さ」をそれぞれVAS法を用いて評価してもらい、得られた印までの距離を被写体個人の値とした。VAS平均値が高かった上位25%の撮影対象者5名（上位群）と低かった下位25%の対象者5名（下位群）の2群間で、スマイルの構成要素と思われる口周囲組織の各計測項目について比較を行った。歯を隠したスマイル写真と通常のスマイル写真の美的評価結果については、どちらのVAS値もすべての写真で学年間で有意差は認められなかった。生体計測の結果では、有意差は認められなかったが、口裂の長さは上位群が3 mm以上長く、口裂の幅は下位群が3 mm長かった。

歯を隠したスマイル写真と通常のスマイル写真の美的評価において、どちらの評価にも学年間で値に有意差が認められないことから、スマイルを評価するにあたり歯や口腔に関する知識量は影響しないと考えられる。学年間で差が認められなかった理由としては、スマイルの素敵さを評価するときに知識を用いて判断するには5秒という時間は短く、一瞬で目に入ってくる直感を用いて判断したためと考えられる。生体計測の結果において、笑顔時の口裂の長さが上位群のほうが長く、幅は短い傾向にあったことから笑った時に口唇が横に細長い形のほうが素敵と判断されやすいと考えられる。また、黒目の下から口角までの距離が上位群は近く、下位群は遠いことから、歯を隠した写真の評価基準とあわせて考えると、口角が上がることは素敵なスマイルの構成要素だと考えられる。

結論として、スマイルの主観評価では、歯科衛生士学科の学生の審美的感覚は学年間で差は認められなかった。VASで評価された素敵なスマイル上位群と下位群との比較では、笑顔時の左右の口角間の距離は長く、上口唇赤唇縁最上点から下口唇赤唇縁最下点までの距離は短い傾向にあった。以上より、素敵なスマイルの条件は、口は開きすぎず唇が自然に横に広がり口角が上がり気味となることであると再確認された。